

○広島市の復興の軌跡（第8回）・・・被爆建物「旧陸軍被服支廠」について

JR横川駅前から大学病院行きのバスに乗って20数分、出汐町のバス停車。陸橋を渡り、皆実高校・県立工業高校正門前を通り過ぎて直ぐ左折し、車一台が通れる小路に入ると左手前方に巨大なレンガ造の建物が見えてきます。この小路を建物に沿って歩き突き当りを左折する間、ゆっくり歩いて10分、L字形で4棟ある建物が被爆遺構群「旧広島陸軍被服支廠」です。

1. 戦前の姿

広島陸軍被服支廠は1905年（明治38年）に東京、大阪に次ぐ三番目の、主に軍服・軍帽、軍靴の製造工場及びそれらを保管・供給する施設として陸軍施設が点在する旧広島市の東南部の一角につくられました。現存する4棟は1913年（大正2年）に竣工したもので外観はレンガ積みですが、内部は鉄筋コンクリートのラーメン構造になっています。被服支廠は日本におけるRC造の建築物として、その過渡期に建てられたものとして、建築史の上でも「貴重な資料」と言われています。



広島陸軍被服支廠絵葉書

2. 被爆時の状況

1945年8月6日、被服支廠は爆心地から2.7キロの地点にあり、爆風により屋根が大きな被害を受けましたが、外壁が60cmと厚かったこともあり、火災や倒壊を免れました。そのため、被爆直後から避難してきた人の救護所として使われ、多くの被爆者がここで息を引き取りました。その当時の惨状は原爆詩人、峠三吉の「倉庫の記録」に余すところなく描かれています。



爆風により変形した鉄扉

『その日 いちめん蓮の葉が馬蹄型に焼けた蓮畑の中の、そこは陸軍被服廠倉庫の二階。高い格子窓だけのうす暗いコンクリートの床。その上に軍用毛布を一枚敷いて、逃げて来たものたちが向きむきに横たわっている。みんななかろうじてブローズやモンペの切れはしを腰にまとった裸体…、

八日め がらんだどうになった倉庫。歪んだ鉄格子の空に、きょうも外の空地に積みあげた死屍からの煙が上がる。……』(原文「倉庫の記録」より抜粋)

3. 戦後の変遷

戦後、この巨大な軍施設「被服廠」は数奇な運命を辿ります。出汐町の大部分を占めていた敷地は広島大学、広島高等師範、財務局庁舎、公務員宿舎、県立学校、道路用地、その他民間の事業用地に次々と転用されて行き、建物は現存の四棟以外は全て解体されました。その後、一棟が広島大学の学生寮に、残り三棟を日本通運が倉庫として所有していましたが、1995年には日通も使用を止め、広島県に譲渡、1997年以降今日まで、全く使用されていません。



日本通運の倉庫時代

この間、建物群を管理する広島県は旧被服廠の被爆建物群の再利用について、有識者による会議を持ち「文化・歴史・平和・アジアの視点を基本に活用すべき」との結論を得ています。「博物館」「芸術文化拠点」「エルミタージュ美術館分館」などの構想がいくつも挙がりましたが結局、バブル崩壊以降の厳しい財政情勢下、具体化に至っていません。

旧制中学4年生の時、ここで被爆した中西巖さんは「旧被服支廠の保全を願う懇談会」をつくり、保存・活用を求めて活動を続けており「老いゆく被爆者同様、建物の劣化は進んでおり、残された時間は長くない」と訴えます。

4. 現在の状況

広島市に登録されている被爆建物は85件あります。来年の被爆70年を前に広島市の松井一実市長は「被爆の実相を伝える建物を守ることは重要、歴史的意義、老朽化の度合いなどを踏まえ、保存のための支援策の見直しを進めたい」と記者会見で被爆建物の保存に意欲を示しています。

私が現場を訪れた時、建物周辺の生い茂った夏草の刈り取り作業が業者によって行われていました。爆風で変形した鉄扉、半開きのもの、扉の落下を防ぐグリーンネット、藁が壁面全体を覆っている箇所…、その当時を想起させるとともに「今」があります。しかし、ぐるりと回ってもこの建物の説明板はどこにも見当りませんでした。ある看板は「ここは国有地です。許可なく使用しないで下さい」「犬にフンをさせるな!」のみです。これが被爆建物の中でも保存を求める声が高まっている「被服廠」の“実態”です。



撮影 筆者、8月末

(編集委員 三宅恭次)

○広島復興の軌跡(第9回)・・・被爆建物「本川小学校」について

本川小学校は爆心地が一番近い小学校である。太田川(本川)を挟んで平和公園の対岸にあり、東方向に原爆ドームを望むことができる。『はだしのゲン』に登場する学校としても知られ、原爆ドームの佇まいと朝夕の平和の鐘の音は生徒の平和への心呼びさませてくれるという。

1. 戦前の姿

学校の少し南側に位置する天満橋から本川橋への通りは昔の山陽道(西国街道)で、このエリアは江戸時代から商業地域として栄えており、学校の創立も明治6年と早い。昭和3年には市内の小学校として最初の鉄筋コンクリート校舎が落成。レストハウスや旧広島市役所を手掛けた建築家増田清の設計による、地上3階地下1階、L字型の平面を持つ端正な建築で、対岸に建つ産業奨励館とともにハイカラな佇まいであった。



戦前の姿
arch-hiroshimaのHPより

2. 被爆時の状況

昭和20年8月6日の原爆は当校の東360m、高度約600mの上空でさく裂し、運動場で遊んでいた子供たちは一瞬にして命を奪われる。爆風は校舎の窓枠を吹き飛ばし、壁をくの字に曲げ、強烈な熱線により自然発火した炎が窓という窓から一斉に吹き上げ、校舎内の全てを焼き尽くして自然鎮火。逃げ遅れた子供たちの亡骸が教室内で多数発見される。

学童疎開をしなかった1・2年生の400人余の児童と10人余の教職員が亡くなった。生存者は教員1名、児童1名のみ。

翌7日、ここは臨時病院・救護所となり、校庭では多くの死者が焼かれていた。



昭和20年被爆後の姿

3. 戦後の歩み

その後、校舎は最低限の補修を施され、翌21年2月には吹きさらしの教室で授業が再開された。教員4名、児童45名。

昭和24年、平和記念都市建設法が制定され、翌年に文部省より平和都市記念学校の指定を受ける。

昭和26年にはL字型被爆校舎の南部分を解体して、西校舎と講堂が整備される。講堂は第6回国民体育大会のレスリング会場となり、天皇皇后両陛下が行幸される。

昭和29年に管理校舎、32年に南校舎が完成して現在の飛行機型の校舎配置が整う。

昭和62年に被爆(東)校舎が解体され、63年4月に新東校舎と被爆校舎の一部を保存活用した平和資料館が完成する。



昭和21年授業風景

4. 平和資料館

平和資料館は鉄筋コンクリート造地上1階地下1階。3階建て



昭和25年頃

だった被爆校舎の一部の地階と外壁を残し、内部を改装して昭和63年5月に開館した。

設計を担当した前岡智之氏は「被爆校舎の保存には新耐震基準に基づく耐震上の問題があった。2階床スラブも含めて上階を撤去し、積載荷重をゼロにすることによりクリアした。被爆建物は一度壊すと復元は不可能であり、惨禍を伝える貴重な生き証人として多くの子供達の心に届いて欲しい。」と語る。

下駄箱が置かれていた地下室を中心に当時の焼け跡が残るなど、原爆の被害状態をそのまま残し、被爆の証として保存されている。

主な展示品は被爆状況の写真パネル、校内で見つかった溶けたガラス瓶、産業奨励館から元安川に崩れ落ちた御影石、かつて原爆資料館に置かれていた被爆直後の市街地パノラマ模型、慰霊碑の碑文「安らかに眠ってください・・・」の額、その他。

平成10年9月には入館者数10万人を超える。ただ外部から直接出入りできず、見学には小学校側に事前申し込みが必要なため不自由さを感じる。袋町小学校並みに公開性を高めれば、もっと入館者は増えるであろう。

* (主な参考文献) 本川小学校のHP 及び平和資料館のHP 他



平成26年8月平和資料館

(編集委員 瀧口信二)

第15号(平成27年1月15日)

○広島復興の軌跡(第10回)・被爆建物「旧帝国銀行広島支店(アンデルセン)」

広島市中心部一番の繁華街、本通西詰に瀟洒な建物、広島アンデルセンはあります。道路に面して白いベンチと鉢植えの花が置かれており、店内からは行き交う人を眺めながら食事を楽しむことができます。しかし、恐らく通行客もお店のお客さんもこの建物の案内プレートを目にしない限り、今や、この建物が被爆建物であると知る人は少ないのではないのでしょうか？

戦前の姿

この建物の前身は日本最初の私立銀行、旧三井銀行広島支店です。旧日本銀行広島支店など多くの銀行建築を残している長野宇平治の設計により1925年(大正14年)に建てられました。竣工当時の外観は左右対称、正面玄関には上下異なる柱頭がついた丸い石柱、三連の矩形窓、正円アーチなどルネッサンス風の美しい、鉄筋コンクリート造2階建でした。1943年には三井と第一銀行が合併して帝国銀行広島支店となりました。



被爆の状況

1945年8月6日、原爆投下時、爆心地から360mのこの建物には宿直行員6人、女子行員12~13人がいましたが生存者は確認されていません。建物自体は大きな吹き抜けがマイナスに作用し、屋根の大部分が崩れ落ち、内部は劫火に見舞われました。屋根を支えていた梁や柱は鉄骨が露出して垂れ下がったり、亀裂が生じていました。ただ、アメリカ製の大金庫は被爆に耐え、現金や帳簿類は無事でした。



戦後の歩み

帝国銀行は被爆直後から日銀などで仮店舗営業したのち1950年5月、修復を終えたこの店舗での営業を再開しています。

建物自体が著しく破壊されたため、修復は難しいのではないかと問われ、一時、ヒロシマの象徴として産業奨励館を残すか、帝国銀行の廃墟を保存するかの議論も交わされたようです。

「廃墟を保存」とまで議論された建物は山下寿郎設計事務所の修復計画、藤田組施工で見事に蘇りました。具体的には旧来の柱は全て撤去して新たに8本の独立柱を設け、1階の床と2階のギャラリーを撤去、吹き抜けを縮小して2階の床を柱と関連させて新設しました。

1954年に行名が三井銀行に戻り、1962年まで営業ののち、三井は新店舗に移転、この建物は他の金融機関の仮店舗として使われました。

広島アンデルセンオープン

1967年、タカキベーカリーが所有者である三井銀行からこの建物を買い取り、今日に至っているのですが、取得にあたってタカキの創業者・高木俊介夫妻は渡欧、ローマで菓子メーカーが歴史的な建物を現代的な感覚で上手く利用し、古いものを大切に生かし、その雰囲気の中から新しいものを育てていることに感動。高木夫妻は古い建物をそのまま引き継いで、北欧調の「アンデルセン」を創ることを決意、2階の吹き抜け部分はレストランとして利用、被爆に耐えた金庫室は扉を外し、パン製造の冷蔵庫とするなど、古い建物を生かす形で「広島アンデルセン」がオープンしました。

その後、敷地南側に新館建設、旧館の耐震補強工事など数度の改修工事を経て今日に至っています。特に2001年、被爆建物である旧館の改装工事では総工費1億5000万円掛けて、柱46本に補強用の鉄板を巻き、岩綿を吹き付ける工法で建物の維持に注力したことは特筆に値します。

アンデルセングループは2018年に創業70周年を迎えます。その時期に合わせて広島アンデルセンのリニューアルを計画しており、旧館部分(被爆建物)を取り壊すか耐震性を高めて改築・存続するか、検討が進められていますが、建物をそのまま残し現在の耐震基準に合う改築を行うことは構造上やコスト面からみて厳しい、とみられています。いずれにしても、2015年3月頃を目途に方向性が示される予定です。



オープン時



現在

* (主な参考文献及び掲載写真) 広島アンデルセンのHP等

(編集委員 三宅恭次)

第16号(平成27年3月15日)

○広島の復興の軌跡(第11回)・被爆建物「旧日銀広島支店」

旧日本銀行広島支店は広島市の中心的な繁華街である紙屋町や八丁堀から至近のところ、広島電鉄の市内電車(広島駅⇔広島港)の袋町電停を降りた東側にあります。

日銀広島支店として1936年(昭和11年)から1992年(平成4年)の間、中区基町に移転するまでの56年間使用されました。

戦前の姿

旧日銀広島支店の前身、広島出張所は1905年(明治38年)に水主(かこ)町に開設されましたが、業務拡大に伴い、この地に移転、建設されたもので、設計を担当したのは当時日

銀の技師長だった建築家、長野宇平治。長野は戦前に日本銀行本支店を15件手掛けており、現存しているのは8件で、被爆建物の旧広島支店もその一つです。

建物は鉄骨鉄筋コンクリート構造、地上3階、地下1階。外観は渦巻き状の柱頭をのせた角柱などギリシャ建築・ローマ建築風の古典様式を取り入れており、広島における昭和初期を代表する建築物の一つです。

被爆の状況

1945年8月6日、広島支店は爆心地から380mという近距離にありましたが、堅牢な建物ゆえ被災に耐え、今日、現存する被爆建物の中では極めて良好な保存状態にあります。原爆投下時、中央部の吹き抜けガラス屋根は大破しましたが、建物自体は天井も落ちず、倒壊を免れました。1、2階は錠戸を閉じており、地下金庫室とともに内部損傷も免れています。行員のほとんどは1、2階で勤務しており、被爆したものの、一命はとりとめました。しかし、3階は窓を開けていたため、間借りしていた大蔵省広島財務局の職員16名の大半が死亡しました。

復興の歩み

建物の損壊が軽微であったため、その日から被災者の収容所となる一方、7日にかけて行内の後片付けを終え、8日には業務を再開。さらに被災して営業が不可能になった市内の金融機関のため、窓口を11区分し仮営業所を開設、預金の引き出し、支払業務に応ずる場を提供しています。

実は私が中国放送の記者時代の1985年（昭和60年）、被爆40周年特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」を制作しました。壊滅状態になった広島が短時日で如何にして復活していったかを当時を知る16人の方にインタビュー、被爆当時の映像と「今」を交え構成した番組です。その一つのコーナーが金融の混乱と市民の不安を未然に防ぐためいち早く業務を開始した銀行の果たした役割についてです。当時、芸備銀行（現在の広島銀行）塚本支店に勤務していて、開設された日銀の仮窓口で支払業務を行った松田勝さん（76歳）へのインタビューを「窓口」の前で行いました。

「…99%は引き出しの人ですよ。通帳も印鑑もないんですが、窓口の我々もいろんな支店から来ており、お客さんと顔見知りなもんですから、この人なら大丈夫じゃろうと、まあ、勘、勘ですよ。後になって調べたところ、思い違いはあっても、紛争のもとになったの是一件もありませんからね…。」

いち早く金融機関の営業再開ができたのは当時、芸備銀行の副頭取、伊藤豊さんが日銀の吉川支店長に再開の必要性を説き、支店長も全く同じ考えで、日銀の一階部分の提供と支払資金の融資を約束したことによってでした。

松田さんは伊藤副頭取のことを「…こういう時期に銀行が不安を与えてはいけないと、決心といたしますか、強調されたわけですよ。これが立ち上がり早かった一番大きい原因じゃないかと思うんですけどね。お客さんの信頼に応えるのが金融機関の使命だぞ、いうふうなですね…」と私のインタビューに語っています。なお、他の同様の「証言」が広島新史～経済編～の22ページ～25ページにかけてあります。

基町へ移転

日本銀行は1992年に広島支店を中区基町の広島市民病院東側に新築移転し、旧支店については1996年、売却方針を明らかにしました。これを受けて広島市は「跡地利用構想検討委員会」を設け、日銀との交渉を始めました。広島市は無償譲与を要望、日銀は原則時価売却を主張して譲りませんでした。最終的には日銀が「文化財指定」を条件に広島市の提案を受け入れました。2000年7月には広島市が市の重要文化財に指定。平和記念都市建設法に基づき両者が使用



川本俊雄氏撮影



現在の旧日銀広島支店

貸借契約（無償貸与）を結びました。無償貸与期間中は市が維持管理費を全額負担、固定資産税などの税を免除することとし、日銀は国の重要文化財の指定がされた場合は「無償贈与」することが正式に決まりました。

芸術・文化活動の発表の場

2001年、広島市が「民間団体の芸術・文化活動の発表の場」として暫定活用を始めて以来14年が経ちます。絵画・写真展、パフォーマンス、神楽などが不定期に催されています。一階に関していえば受付カウンターで仕切られていることや音響面で問題があり、「芸術・文化活動発表の場」として決して「使い勝手の良い場」ではありません。しかし、先述したように被爆建物としては極めて良好な保存状態にあります。建物内部も被爆2日後に預金の支払い窓口になった受付カウンター、被爆時にガラス片で傷が付いた支店長室の壁、地下の金庫室など等、当時を偲ばせる状態で保存されています。



日銀旧支店が有効活用されている例として近隣では岡山と松江にあります。旧岡山支店は「ルネスホール」の名で多目的ホールとして、旧松江支店は製造・販売一体型の工房、レストラン、喫茶店、各種イベントを行う「カラコロ工房」として観光客も多く訪れます。

イベント空間として活用

2月12日の中国新聞オピニオン欄で論説委員の東海右左衛門直柄氏は「被爆建物の残された数は極めて少ない。今、必要なのは、地域ぐるみで被爆建物の価値と活用策をあらためて議論することではないか」と問題提起しています。被爆70周年の今年、被爆建物として象徴的な存在の一つでもある旧日銀広島支店について方向性を出す時期ではないでしょうか？

*（主な参考文献及び掲載写真）日銀広島支店のHP等

（編集委員 三宅恭次）

第17号(平成27年5月15日)

○広島の復興の軌跡（第12回）～被爆70年企画～

広島復興に「二葉会」あり！

「あなた、二葉会を知っていますか？」、街頭インタビュー風に街角で聞いたとすると、恐らく返って来る反応は「知りません」、「二葉中学の同窓会か何かですか？」「二葉山に登る会ですか？」などがほとんどでしょう。「広島復興に大きな役割を果たした経済界11社の集まり」、と答えられる人は年配の人で広島経済事情に詳しい極限られた方たちでしょう。

二葉会は昭和29年(1954年)1月、広島主要企業のトップ10人が広島駅北側の二葉の里にあった旅館「芙蓉別荘」に新年互礼会を兼ねて集まり、結成されました。

10社は中国木材防腐(ザイエンス)、東洋工業(マツダ)、中国電力、広島銀行、広島相互銀行(もみじ銀行)、中国新聞社、広島電鉄、広島ガス、藤田組(フジタ)、中国醸造で、後に中国電気工事(中電工)が加わり11社になっています。二葉会の名称は芙蓉別荘の部屋の障子を開けると裏庭から二葉山が眺められたことから付けられました。

二葉会結成の発端になったのはその前年のラジオ中国(中国放送)の番組「新春座談会 初夢を語る」での中国木材防腐の田中好一社長の発言でした。

これについて、座談会に出席した浜井信三さん(1905年～1968年、初代公選広島市長、通算4期務める)が昭和42年(1967年)放送のRCCラジオ番組「ヒロシマ22年」で次のように述べています。

「…田中さんがですね、そういう本当の夢っていう話は今日はできんけれど、いろいろ人生の夢っていうようなものは私はもっとなるんだと、それをひとつ話してみようかということでは、広島市にいい公会堂をですね、ぜひ作りたいということ、もう一つは、広島物産の、物産陳列場を作りたいと、もう一つはいいホテルを作りたいと、この三つのことをね、ぜひ我々は協力してやりたいという夢を持っているという話をされたんですよ…」

この放送は経済界に大きな反響を呼び「広島市ができなければ我々(経済界)の手で作ってやろう」ということに話は進んだのです。

「公会堂を建設して市に寄付しよう」との呼びかけに賛同したのが上記10社です。公会堂は平和記念公園の西端、現在の広島国際会議場のところで、ホテル、レストラン併設の5階建て、総工費3億5千万円(現在の100億円相当)を10社を中心に全額経済界が集め、昭和30年(1955年)に完成しました。



広島市公会堂

二葉会はその後も広島復興に大きな役割を果たしました。広島県庁舎、広島一福山電化工事の建設債引き受け、広島バスセンター、広島ステーションビル、県立体育館…、その中に旧広島市民球場があります。これは当時の東洋工業社長、松田恒次さんの「これからはゴルフの時代かもしれないが、まだまだ高級な遊びで、一般大衆のものではない。それよりも広島カープのホームグラウンドとしてナイター設備のある球場をつくろう」との提案をきっかけに昭和32年(1957年)1月、二葉会は1億6千万円の寄付を申し合わせ、広島市に伝えました。建設工事は翌2月22日着工、わずか5か月後の7月22日に完成しました。7月24日の初ナイター公式戦の対阪神戦、残念ながら1-15と大敗しました。建設費用総額は3億2千万円掛かっており、その後、二葉会は経済界の寄付に対して「半額を持つ」ことが不文律になりました。



初代広島市民球場

RCCの被爆40周年特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」(昭和60年 1985年制作)で、二葉会結成メンバーだった森本亨さん(当時89歳、広島相互銀行会長)は公会堂建設について次のように語っています。

「…公会堂ですね、今のあれへホテルもくっつけてみてね、ホテルはいかんのよあれは、公園地帯でね。それを池田(勇人)さんがおられた関係でね、無理にくっつけて、あれを新広島ホテルゆったかな、あそこへ作ったのが(二葉会)の最初でしょうね。

昭和30年ですかね。あのころから二葉会ということで、何度も何度も集まって、しかし中心はね、白井(市郎：中国醸造)、田中(好一)、藤田(定市：藤田組)、松田(恒次)というところでしょうね。」

その後も「二葉会」は温厚な人柄でまとめ役の田中好一さんと強烈な個性で突っ走る牽引型の松田恒次さんの両輪で広島復興の主なプロジェクトで中心的な役割を果たしていきました。森本さんは昭和30年～40年代の「二葉会」を振り返り次のように話します。

「…まあ二葉会というものの、戦後の務めはもう終わっておりましたよ。今、二葉会がああして、こうするという時代とは、もう背景がちがいます、と思います。

けれどもその当時は、私はだいたい二葉会というものは広島の復興には物心両面に、(広島市長は)浜井さんから今度は山田(節男)(昭和42年～昭和50年)さんへ来とるのかな、渡辺(忠雄)(昭和30年～昭和34年)の時はちょっとありましたよね、山田さんの時まで寄付しとるとおもいますよ。私の口からいうのもおかしいが、まあ、寄付しとると思うね。」

最近、ある経済界のトップが記者から二葉会のことを聞かれ「まだあるんですか？」と答えたという笑えない話があります。

厳然として存在しています！ただ、結成当時から会則なし、会長置かず、事務所なしという会ゆえにその活動、功績は「広島新史」や「広島商工会議所90年史」にもそれらしき記載は見当たりません。しかし、現在でも広島商工会議所が窓口になり、広島でのビッグプロジェクトが計画された場合、その資金負担で行政などが半額、経済界が半額と決まれば経済界分の半額、全体の4分の1を負担しています。

被爆70年に当たり、たぐいまれなる経済界のリーダーたちによって、「広島復興」が成し遂げられたことを今一度思い起こす必要があるのではないのでしょうか。

(編集委員 三宅恭次)